［課題］

第 1 回課題　(1500 字～2000 字)
①　「絶対優位の原理」および「比較優位の原理」について、それぞれ具体例を挙げながら説明しなさい。

［本文］

まず「絶対優位」とは、「ある国が備えている、任意の製品をほかの国よりも効率的に生産できる能力」を示す。次に「比較優位」とは、「全般的な効率の点ではほかの国にかなわないとしても、ある製品の製造にかんしては、ある国がほかの国よりも効率的になしうる場合の、その力」を示すものである。[1]

「絶対優位」の一番の例は、近代経済学の創設者アダムスミスである。著書『国富論』に次の一説がある。[2]

> 賢明な家長なら、買う方が安くつくものは自分の家で作らないようにするのが当然である。仕立て屋は靴を自分で作ろうとせず、靴屋で買う。靴屋は服を自分で作ろうとせず、仕立て屋に注文する。農民は靴も服も自分で作らず、それぞれの職人に注文する。みな、近隣の人たちより多少とも優位に立っている仕事に専念し、生産物の一部かその対価で、必要とするものを買うのが自分の利益になることを知っている。……自国で生産するより安い価格で外国から買える商品があれば、自国の労働は自国が多少とも優位にある産業に投じ、自国の生産物の一部でその商品を外国から買う方がいい。

アダム・スミスの考えを分かりやすくまとめてみたい。靴屋の A さんは革を加工する特殊な技術を持っている。仕立て屋の B さんは肌触りのよい素材を仕入れるルートを持っている。農民の C さんは生活に欠かせない食糧を作っている。だから A さん、B さん、C さんはそれぞれ「食糧、靴、服」を自給せず、近隣の人たちより、多少とも優位に立っている仕事に専念し、自分たちが作ったものやそれを売って得たお金で、必要とするものを買う方が自分の利益になるということである。これを国同士の関係に置き換えてみると、貿易相手国より安く生産できるものに特化して、交換することが利益をもたらすという考え方である。これを敷衍すると、あらゆる分野で生産技術の劣っている国が、優れている国と貿易しても、経済的に損害を被るだけで、貧しい発展途上国は、欧米の先進国や中国・東南アジアの工業国と交換しても利益は出ないという考え方につながる。TPP を巡る反対意見の典型である。[3]

一方、「比較優位」の代表は、世界でもっとも偉大な経済理論家の一人と目されているデイヴィッド・リカードである。著書『経済学及び課税の諸原理』で次のような説明がある。[4]

英国は、毛織布を生産するに一年間に一〇〇名の人間の労働を必要とする状態にあるであろう。そしてもしこの国が葡萄酒を造ろうと企てるならば、同一期間に一二〇名の人間の労働を必要とするであろう。英国は従って、葡萄酒を輸入し、そしてそれを毛織布の輸出によって購買するのが、その利益であることを見出すであろう。
ポルトガルにおいて葡萄酒を生産するには一年間に単に八〇名の労働を必要とするのに過ぎぬであろうし、また同一国において毛織布を生産するには、同一期間に九〇名の労働を必要とするであろう。従ってこの国にとっては、毛織布と交換に、葡萄酒を輸出するのが有利であろう。ポルトガルが輸入する貨物が、英国におけるよりそこでより少ない労働をもって生産され得るにもかかわらず、この交換はなお行われるであろう。

絶対優位の考え方ではイギリスは毛織物でも葡萄酒でもポルトガルよりも労働生産性が低いので、いくら貿易をしてもイギリスはポルトガルに負けてしまう結果となる。しかし、リカードは、ポルトガルでは比較的劣位にあり、英国内で比較的優位な位置にある毛織物産業に特化することで、英国内においてより効率のよい分野に労働力が投下され、葡萄酒の輸入よりも毛織物の輸出の方が生産性が上がって利益が生じると説明する。つまり、リカードは相手国との競争力の比較ではなく、国内産業における生産性の競争を重視しているのだ。[5]

リカードもアダム・スミスと同じく自由貿易論者だが、弱肉強食の自由貿易ではなく、それぞれの国が時間と資源のもっとも効率的な使い方を作り出すことで、どちらの国も利益を上げることができるものだと断じている。[6]　比較優位の原理に立てば、国内産業の集中によって、安価で多くの種類の商品が普及し、消費者の実質所得が増え、生産量以上に消費量が増えることが予期される。

文字数：1861 字

＜引用・参考文献＞

---

[1] ナイアル・キシテイニーほか『経済学大図鑑』三省堂，2014，p342 引用
[2] アダム・スミス『国富論』日本経済新聞出版社，2007，p32-33
[3] 菅原晃『高校生からわかるマクロ・ミクロ経済学』河出書房新社，2013，pp. 111 参考

[4] デイヴィッド・リカード・青空文庫『経済学及び課税の諸原理』
https://www.aozora.gr.jp/cards/001164/files/43670_18988.html　（2024/4/21 参照）
[5] 菅原晃著，前掲書，pp.115 参考
[6] ナイアル・キシテイニーほか著，前掲書，pp. 82 参考